

土屋正義編輯

繪本石山軍記

第三編

六

遠 2269 26



特
14
2269
26

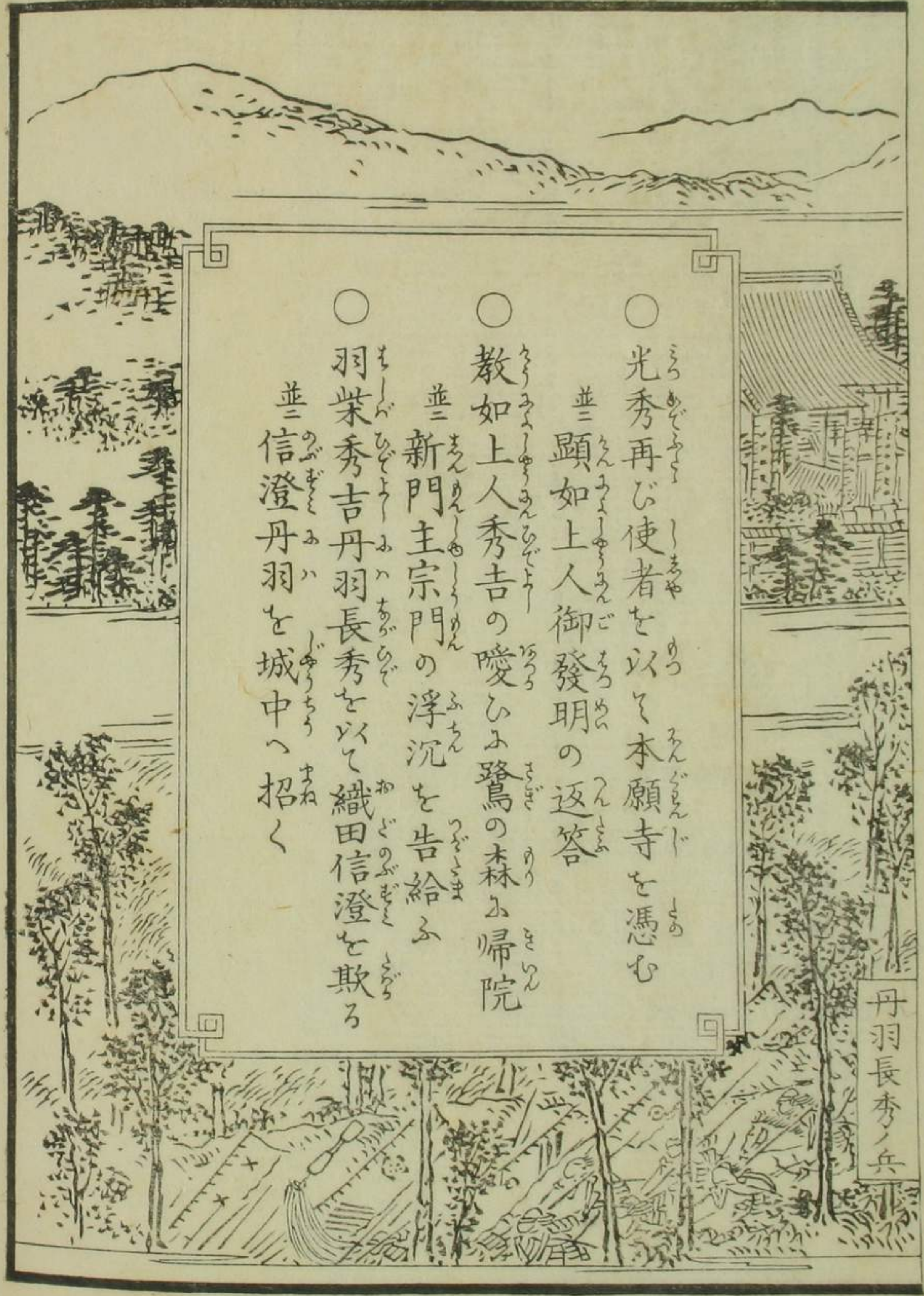


繪本石山軍記第三編卷之六目錄

○鷺の森御坊不意合戦
並 上人御一門生害御覚悟

○寄手丹羽勢陣中大騷動
並 鈴木孫六趁跛踊りの起原

路島森御堂



丹羽長秀ノ兵

○光秀再び使者を以て本願寺を憑む
並 顯如上人御發明の返答

○教如上人秀吉の唆ひみ鷺の森に歸院
並 新門主宗門の浮沈を告給ふ

○羽柴秀吉丹羽長秀を以て織田信澄を欺る
並 信澄丹羽を城中へ招く

繪本石山軍記第三編卷之六

土屋正義 編輯

○鷺の森御坊不意合戦 并び上人御一門生害御覚悟

却説此時泉刃塚に宿陣せし四國渡海の副將ありける丹羽惟統五郎左衛門尉長秀ハ天正十年六月朔日信長公本能寺猛可に塚を勢揃へし軍勢押出すの催し者ゆれば近郷近在の門徒の輩太訝しき繚ろ思ひ把四國へ渡れる軍兵ふるに海上に敵待とも聽ず此所を勢揃へし做繚尚く不意小鷺の森へ押迫り御門主を害し奉人心を何をも有此爲体せし御報知稟すに如べし候し追々鷺の森御坊へ注進依之頭如上人恐れ給ひ家老僧俗の者を集められ上人衆人へ向ひ

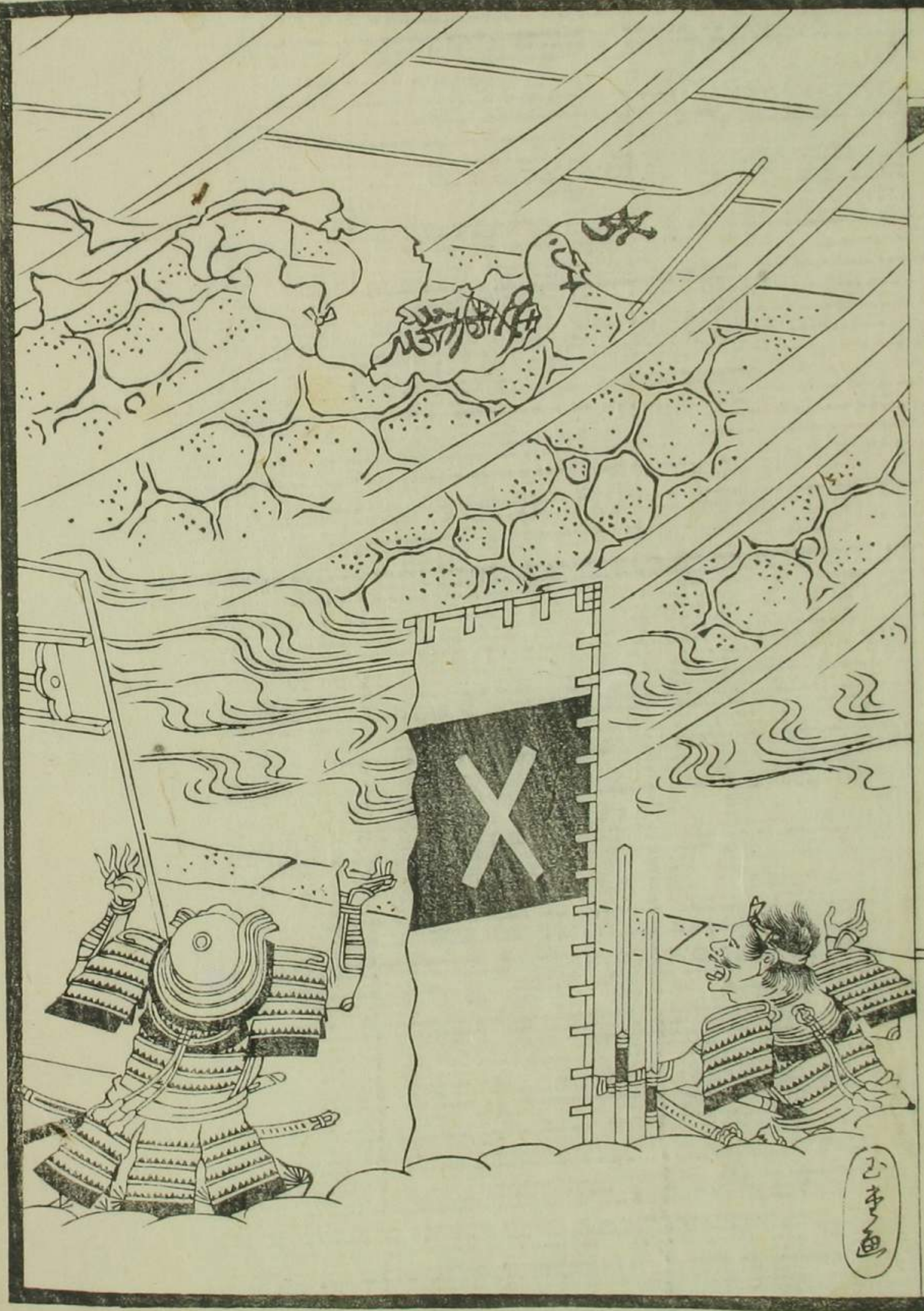
曰ふ様原来明智が稟し越へば赴き信長よりの欺謀小へふく全く實情の密告ありけり右に左先余準備おんバ不意の困惑出来ず一も聰くも命せ度されりまば卒に雑賀の鈴木孫市志摩與四郎等と始め近村の門徒們を召寄らる此御報知小打驚きつ鈴木志摩ハ二も勿論あり聽傳ふる信心の門徒們掩りて馳集りて立地五百余人の民農夫鷺の森御坊を固めり翌水を六月二日とふり丹羽五郎左衛門尉長秀ハ介勢三千余人塚を立り紀伊海部郡小押来り鷺の森より十丁許り北小野陣を取ら威風を示し總勢を二手に分隊して一手ハ大将丹羽五郎左衛門尉溝口伯耆守青山伊賀守戸田武藏守坂井與右衛門等一千五百人亦一手ハ丹羽腹心の郎等江口三郎左衛門

堀江左京村上周防守尾藤喜兵衛等一千五百人左右より同時小攻討んとし事余準備者へにらまば御坊も家長下間一族と始め坊主衆にハ塚の真宗寺河内の専光寺撰所小濱の毫接寺同國三番の定専坊本専寺武士にハ雜賀の鈴木一統孫市豊人志摩與四郎宗門の浮沈今此期ありと老たる若きの嫌ひかく近在近村の門徒農夫們掩りて馳集りて身命を抛ち防ぎ支んとす實や一向真宗の断絶否や唯今日に極りぬまば信長を恨み上人を悼み歎き悲まふと云小者おんまどく時の武將の權威を振る表裏不實の討手を向れば上人も今ハ是まどく思し召御臺所雅君を始りて其外の御一族の衆人までも各御生害の覚悟を究らま門徒の士卒を禮述給ふ御

痛ハ一くも亦勿体なく一借も丹羽が軍勢三千余人潮の湧如く押寄
来り御築地繞り七重二十重に取圍み関を嚙と拳よりくるは危や
驚の御堂も落滅せんうと塊消止計りありく至然と豫て覚悟の門徒
の道俗も皆一同に声を放ちて噫無念やと叫びて哭立たるハ叫喚地
獄の苦哭乃声も斯やと計り躬に徹へしとや下間頼簾声を激しや
をれ心臆したるハ旁々高祖聖人の洪恩を思ひ命渥りに法敵を防ぎ
協をぬ際にハ陣没せし余時こそ日来念ひ奉る西方弥陀佛光明を放
ちて佛種の為に忠戦盡す汝達の働きに佛助を添らま佛敵織田信長
の我慢乃鋒先折き給せん無量不可思疑祈れや祈れ勇みを附て指
揮せしは雜賀の門徒鈴木の一統之を聴より感稱あしといくも諭給

へる者哉如来に任せ九夫の俺們未来の先陣ころ本望され夫々
部索し々持口を堅め弓鳥銃を犇々と押並べ得物引提待居するは健
氣ふりける勇民們ふり時小寄手の先鋒江口の軍勢近々と押寄鳥
銃を繫懸火矢稲妻の如く射放ちて暫時乗落さんとぞ操立たる
坊中にと茲攻破られおば早御門主にも御生害在ん防げや禦げし声
々に呼より並へ立たる鳥銃の筒先火蓋を放つて聯發し必死と力を竭
し働きしが目に餘る敵の大勢に纒五百有余の門徒勢四方の防ぎに進
退任せず何方も持惚へぐくぞ着へりり寺内の防戦難義と着るよ
り鈴木孫市同く豊人同く孫六斯ては果ドと思ひくまバ銘々手勢を引
具しつ惣門左右へ押開かせて稲麻の如く把圍みたる猛威小蔓る敵の

鷲の森
襲撃の時
織田勢不吉の
兆と見ふ図



正幸画

中へ嘯と喚ひて突々入摩利支尊天の暴たる如く前後左右を斬立突
 立今日を渥りの死者狂ひと血の浪上て悪戦ふすにぞ冷ドかりける鈴木
 勇勢暫くハ敵兵も寄着ざりしが元来寄手の兵ハ敵を侮り石山に
 似も付ぬ此小境寺中集り勢も多寡ハ知らり那緯ぞ能仕出さんや踏摧
 ひく驅立べいと倉々手軽く思ひ所鈴木一族ハ猛烈の働き憤勇死力の
 決戦盡せば介鋒先に斬捲られて手痠死人殊更多く江口が先隊突亂
 され一町許り平崩れ小引退く後陣の長秀是を省るより鞍うきに突立て
 采を振斯程の小敵に突破られ脊穢くも逃るは何緯ぞ一個も引る盛返
 せよと声振絞りて苛り立れど引懸りたる兵の癖として逃足の踵後へ
 向ず四度路小散亂して敗出す鈴木孫六此圖を量つて太刀電光小振廻

一つ當るを幸ひ斬伏難伏馳巡つて戦ひるるに寄手の中より誰とも
 知ず一發撞地響り飛来る銃丸孫六が右の足に撃的らき後居る碯と
 倒れ伏ば敵兵孫六を刺留得んと四五個破亂々々と立寄所を孫六片
 足立にて太刀振廻し近寄敵を防ぎ拂へども丁々危く省へる所へ鈴
 木孫市遙に斯く省く宙を蒐つて馳来りて取圍みたる敵兵們を斬倒
 し追散り竟小孫六を脊に負上死地を遁れり引退くを寄手ハ後を追
 んとするを大將長秀是と制めて手負は戦場の病者も同様之を救ひ歸
 るは仁勇あり疎忽に追討ハ士の情小非ず病者と思へば棄置べいと遠
 軍事に馴たる織田家の勇將智仁の示しも聽所ふり既り介鳥も西山
 に傾き遠境進向せし軍勢ゆへ上下炎暑小疲きりハ軍ハ明日早天

兵を續め一同本陣へ引取にらる本願寺御坊の方にも今日ごろ上
下滅盡の時とて食決定の覚悟乃所寄手退き宿陣の容子今宵を
娑婆の余波乃夢り一固所一打聚りて翌こそ潔く陣没遂て豫て御
約束に違ひなく極樂浄土小趣くべし濁世の因縁も是る断期と互に
肅然とて別離を惜み夜半も過ると思ふ刺寄手の陣所を臨み者
るに信孝の軍勢も着到せ哉炬火箭火の光天に赫輝尚旗指物夜嵐
に吹靡し寺外の四方ハ敵兵ありぬ隈もあく唯鐵桶の如く遠巻おせり
門徒の兵卒們是を瞻り噫駭一の軍兵やな翌を寄手此大兵を進ま
せ一同攻寄向ふるなば半時も拒ぎ支へん緯覺東ふし卒や軍此
始まぬ先に最期の称名念ずべしと僧俗等しく念佛の声高く今世

の納めと唱へ上心を頭如上人も御連枝を始め家老以下を悉く召集
り御祖師親寫聖人の御真影を本堂の正面小居させ給ひ御泪堰敢さ
せ給へば末世濁亂の時代小向へば正法妨害是非なきも雖も祖師聖
人在世の御辛苦を積せし此適此宗門弘通在りてより凡三百七十余
年の今に到り化益を蒙る門徒の輩信心堅固を失はざれども佛敵信
長の暴惡に遮られ宗門目前断滅に逮ぶ緯嘸歎ハくこそ思ひ召ら
ん是全く俺不徳よりして法嗣介器に當らぬ故に真影小對ひ潜然
とかき口説く陀給ひ一六一座の衆人是を見奉り偕もく思き信長
哉斯る尊き善知識を欺謀の上に猶害へんと譬方ふき大惡人やと
食拳を握り齒を嚙鳴り怨みの念ぞ稱増りける漸有て上人宣ひ

るは翌ハ風より敵軍攻寄べ一強く拒ぎ戦ふに逮ぶ死期に臨んで罪造りは皆是終焉佛果の障碍となれども末期の一大事を忘るべからば敵兵門内へ込入と省ふは愈々諸俱小自殺せよ一最も本堂に火を懸焼棄べ一弟子も門徒も死出の途にも皆同行の中にて之あれど管ず一蓮託生の座を願ふべ一同行するべき誓の為とて御土器をば把寄ら北門徒の衆中へ下し賜へども是が今世の御暇乞有がたく頂戴仕るとて面々御流きを戴きらるが胸迫りて惚へ得ず一同に引くと哭立々ふは関の声よりも冷しく所理せめて哀れありたり

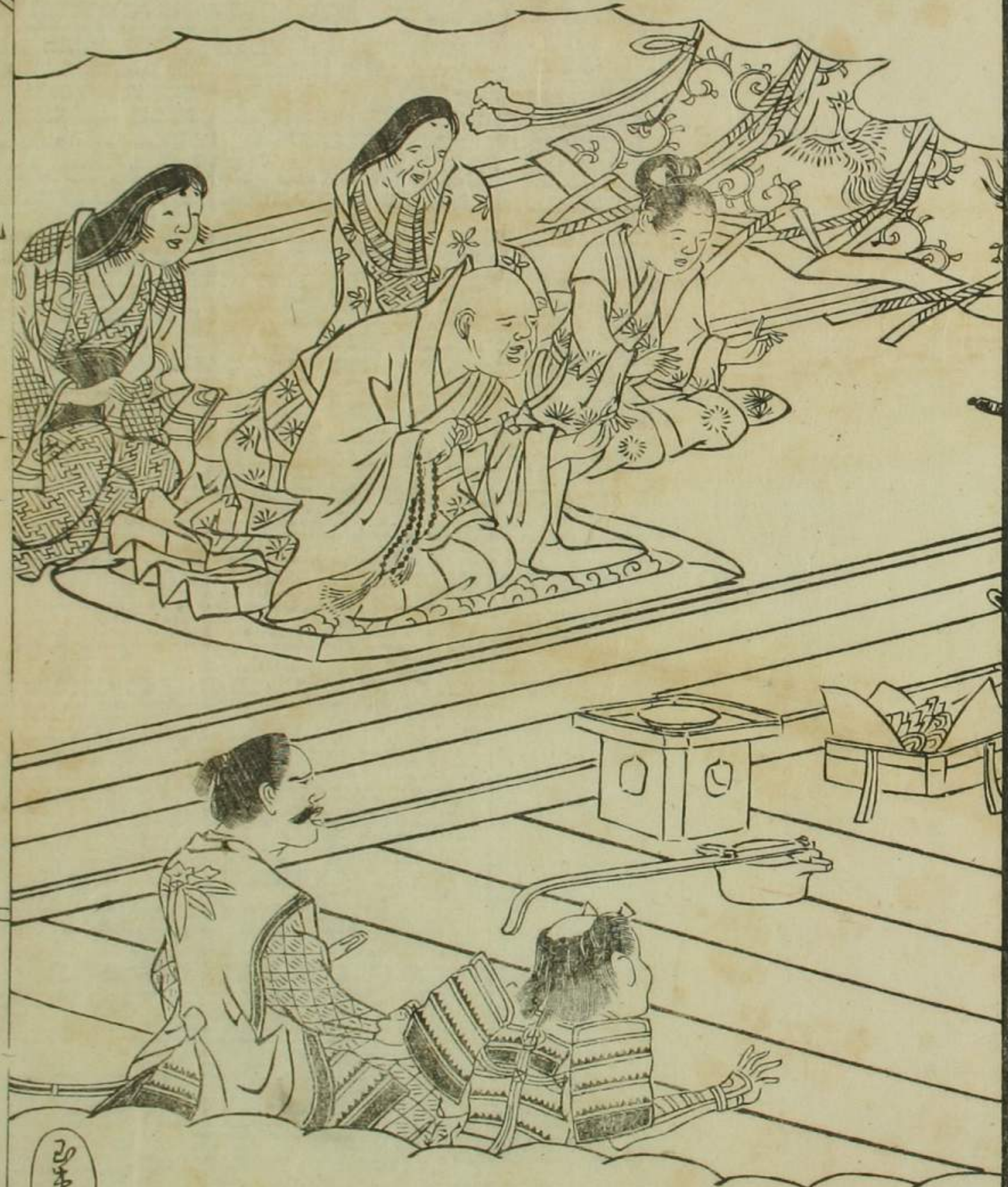
○寄手丹羽勢陣中大騒動 並び 鈴木孫六越波踊の起原

翌きは天正十年六月三日未雲東の明放れざるに寄手の大軍一同

に押詰恰ら勢ひ大地も突裂如く滄海も覆すの形勢にて曳々應々と関を作り隊伍六段小立く扣へにたり余圍み寺中を推き攻落すなきの剛勢あり門徒の面々期しころ緯ゆへ驚や午頭馬頭が追立来しを亡者の勇戦一淡吹せと呼り得物を引提入らば討圍さんと守堅む丹羽が軍勢何の用捨もなく短兵急に乗入やと熊手長柄を手にく把延ひくと堀際へ駈寄所小忽ち空中に數方の声して関を作ると思ふ中に一陣の風に雨雲を誘ひ颯々暴雨の降出すと等しく怪異る余介雲中より丈余の白き布ひらめき空中彼方此方へ翻りて大将丹羽長秀の馬の前へ寸段々々に引裂て落しける長秀始り從兵の者們奇異おがらも立寄省れを南無妙法蓮華經乃首題を書とる正しく信長公の

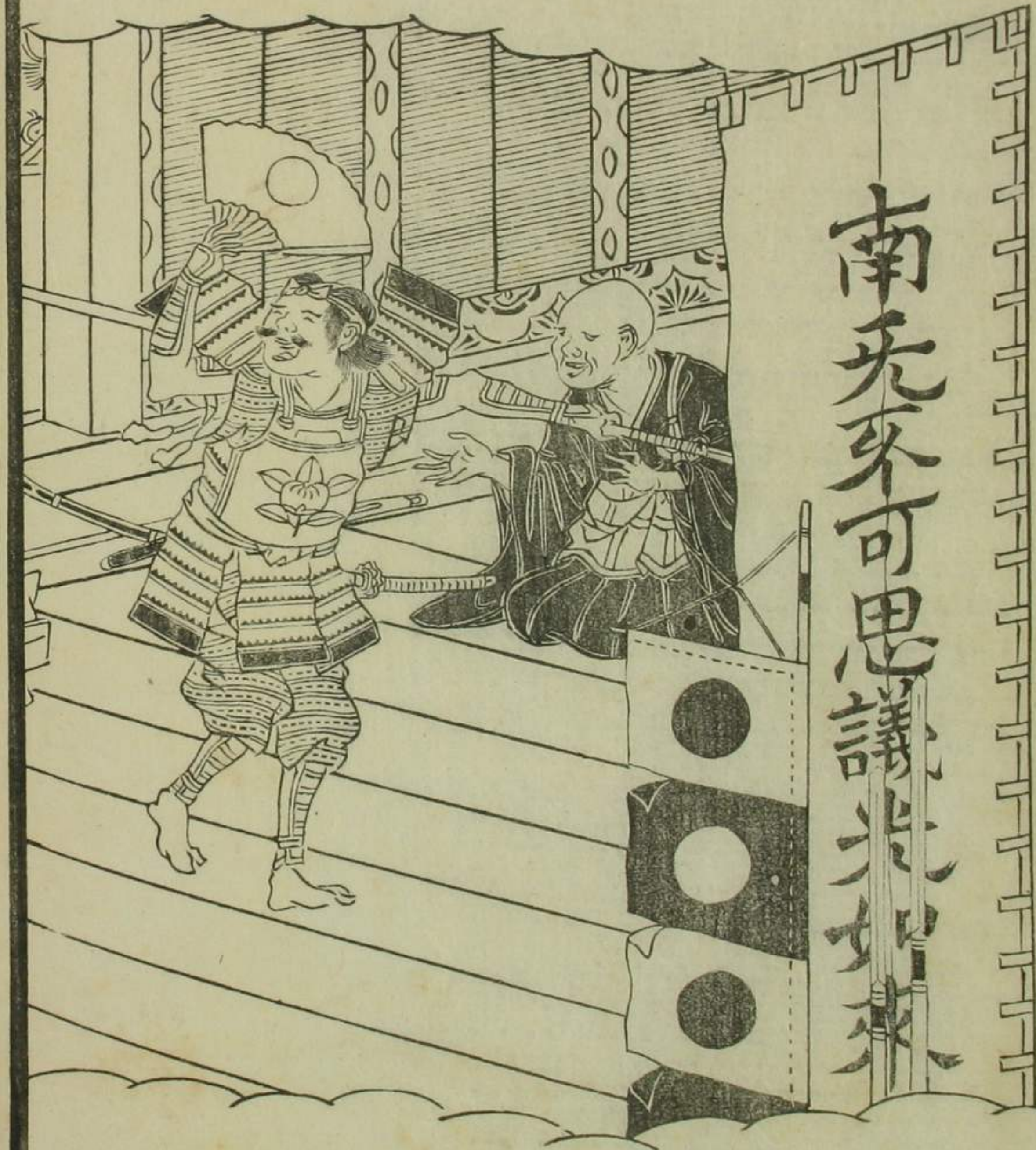
大旗ふりたる長秀も是に愕然として天変奇妖心小分り凶事吉事
 軍の端小裂裂旗着るるを快うううと勇氣も撓とて猶豫居る此時
 御門主顯如上人に御次男阿茶丸君御母子御膝下に伴ハせ給ひ御連
 枝一緒小御生害を定め給えんと思ひ召て既小称名の声も終らせし
 門外の敵は如何やらんと其方を吃と瞻め給へば寄手の軍勢奈何
 りん卒に圍繞を捲ぐし狼狽廻つて後陣より引退く寺中に上人を
 始めとして門徒の僧俗大きに怪しむ噫心得がき敵の混亂乍麼是
 何か謂ふる小や原来斯打籠れるをのどろしく思ひ偽引出きん手術亦
 るべし何條空と乗べらんやと倉一固所小打集ひつて尚も不審を立
 瞻め居るに倍々寄手総軍を崩して旗を卷戟を倒し右往に亂走り

左往小敗退き鼠の如く引散軍勢上方さして騒ぎ引を不思議と云も
 愚かりたる然る寄手案内なる引様小寺中に籠れる衆人も一圓その
 譯心得がき評議區々に為る所へ近郷の門徒乃男女打混ト倒轉
 びつ馳来りて御注進候ふと呼りて満座の席へ進み入れハ衆人余子
 細を尋ね問里人問答へて告る様借も昨日六月二日朝佛敵信長徹
 勢を卒し京四條西洞院なる本能寺と稟すに旅館せし如何なる意
 趣の候小謂小や臣下惟任日向守光秀旅館小勢の空虚小乗て謀叛
 の旗を押し立て不意に本能寺へ亂入し遂に信長主従を討課せ續い
 二條の城を取圍み息男信忠をも攻殺し洛内外の大騒動最中唯今當
 寄手の陣中へも既し此注進の候より諸社惣崩れ小成り引候ふ御



山崎

鈴木孫六
趁跛踊
の圖



南无不可思議光如来

執して旧非を懲す且靈場を焼失い僧徒を殺し數年本願寺に迫つて不仁の争戦一無体に佛地を立退し尚宗門を断滅せしめんとなす加之此節又高野山靈刹をも責潰さんと軍馬を差向総く三寶破却の惡逆より諸佛諸天乃怒にふれて家臣光秀が弑逆小遣給ふ是保かか過去より一敵同士が主従あり双方道れざる惡因縁あり夫一念嗔恚の炎を燃せば万行の修善も消亡と云況て威に移り有謂寺院を崩し數万の人命を屠殺する繚豈夫介報いのふりややハ織田の天下を一世かざりにく半百の夢と覺果にくり殊り今朝鷲の森ふる寄手の陣上り雨雲霰ひ七字首題の大旗を引裂長秀の馬前へ落下りハ自今十三箇年前も過ぐる元龜元年八月の頃

織田勢天王寺口敗戦の砌長秀舍利寺村へ逃退時信長の大旗を持する雜卒長秀が陣中へ周章入りを異形の武者一個頭を引出此大旗をふぐり取り彼雜卒を把り投退何國ともなく逃去ける今時奪れとるか正しく大旗あり十三年ぶりの今月今日再び長秀の馬前へ落ちて信長公の寢死を示せし諸佛諸天鬼神妖魔も信長の惡逆を憤らけり斯る奇怪の有ける小やと躬の毛もとてちて恐ろしかり

○光秀再び使者を以て本願寺を憑む並びに顯如上入御發明の返答時六月四日惟任光秀より鷲の森の御坊へ向く家臣並川金右衛門と云を使者に立せし稟遣しけるは信長の惡逆日々に増長し

高野山本願寺にも佛場佛地責込さんと其頼りに之を強諫お
せども敢て用ひざる而已ありに却て俺を憎んぐ殺さんと光秀
暫く信長小膝候して幕下に隨身せらるる雖も實の君臣とる間にハ
非ず素織田家ハ斯波の陪臣明智ハ清和の流まに於て土岐伯耆守
頼清の後孫に累代足利家の家人あり俺天下を再興せんと欲し
嚮り公方義昭公に供奉し信長を勧めり旗揚を計り足利家を
起さんと盡忠す然るに信長公方を廢去し自ら天下の政事を執行
い俺誤つて渠が奸計小陥り一度は随順おすも雖も今足利家へ真
忠を顯せし信長と討て中國小據給ふ義昭公を京都に迎へ奉り
再び公方と仰ぎ奉らんと欲す希くば上人諸國の門下へ印鑑の檄文

と下し給ひ門徒の輩を催促有て光秀が指揮小随ハハ給ふ公
方への忠義光秀の大慶何事か之に如もの有るるに抑今般貴寺の
危ふき緯宗門断絶せんとも實際に風前の燈火よりも猶浮雲緯譬
ふるに物ふし光秀が信長を討平げしより貴寺安全とる緯を得給ふ
上人此可否を感察あはば速に此議領承ありて五畿内及び近江伊
勢等の門下へ早々指揮を下され光秀が軍に力を添られ織田の殘黨を
打平け弥法敵の枝葉断給はんとも万全の良策は候ふるに就中中
國毛利家に入塊し公方を上洛おさし奉り足利家再興の助力な
まば旁以て違背の有るるに宜く評議有る然るるに光秀に力を戮
せ給ふらば本願寺以前の如く執立稟し加賀能登越前伊勢近江

と寄附し再び石山の旧地へ遷住ふきり倍々宗門繁昌を計ふをし
何令天下泰平助勢有やう偏不頼存ずるふりと言を巧みにして
稟し送まば上人聞し召て使者を待せ一統召寄御評議有しが家老
衆何方も言を揃へ何様我宗門必死に違ひ上下生害を極めし所を測
ず光秀が逆謀り依り佛敵信長と責むして當寺の無異ふる緯を得
ころは物怪の僥倖と稟しふが是全く光秀が働きに宗門再興乃
大檀越より然と使者の旨趣に於てハ此彼義ある所の頼みふれ御
承引有て然るべくんと異口同音で言上せしげ上人御思念あつて
曰ふ様光秀が信長を討つたるは俺宗門を救えんとは非ず己が結
恨を晴さん為り主君と仰ぎし信長を弑す折を幸ひしして當寺に

思懸非義叛逆に與せしめんとなす條使者の口演理り的らずし
て甚し恐るべきの難題あり俺苟くも一宗相承せる沙門より奚ぞ五
逆罪の徒り一味せんや孟子ハ豚母の里に入らずと云り親より重き主
君を殺すは二尊の愍みよも協しぬ者ハ畢竟余時節乃合へたる是
皆諸佛諸天の眞助あり光秀事ハ兩端に遣ひて俺を逆意に引入
んとは僧徒と慢る所存よりして手勢の外小味方なき緯然も有べく
と者透さぬより誤つて逆賊り與力なきは高祖へ不孝宗旨の瑕瑾
此上の汚名乃有べんや決して此頼みに應ずまらして待せし使者へ
答へ給ふ様稟し越る條々最もに候ふ今般俺們父子及び門徒一統
測らず公の御救ひ小領り必死を脱道満足是に過ず依り諸國門下の

者們へ指揮觸達すべくハ候へども數年の防戦り門徒の者も違寢の輩些ふくば一應有司を以て實情相糺し而して後御指揮に隨せ御用相勉させ候ふ間暫く猶豫あり給はるべし遲延も伸く答へ給へば使者並川も詮方なく暇を演る歸京ふりける上人の才辨温順柔和小して寄らず障らぬ介會叔ハ凡慮の逮ぶ所り非ざり後小ぞ衆人思ひ的りぬ

○教如上人秀吉の愛ひ小鷲の森へ歸院并び新門主宗門の浮沈を告給ふ維時織田家股肱の臣乃中に羽柴筑前守秀吉は中國征伐の大將として備中高松の城を水責に毛利吉川と對陣ふして信長公の援助を待りけるに六月二日洛本能寺におゐる信長公ハ光秀の爲に弑逆せ

られ給ふより翌三日の夜り聞へくとは秀吉敬篤き歎く緯大方あはれ己光秀主君の怨敵やその安穩り置べけんや吊ひの決戦を遂ん物と直ちに毛利家と和睦を結び悉く中國の陣を引拂ひ本國姫路城へ凱旋せしれしが此時節本願寺の新門主教如上人の御躬り於てハ密に石山を御退城の後鷲の森御坊へ入せ給へども表向御父上人小は御勘當と有御躬りねぞ天朝且信長公への聞へを憚り鷲の森を出させ給ひつ播磨の地り止錫有けるを秀吉愍みて談合進らせ郎等木下半助を差添鷲の森へと趣らせ奉る本願寺はハ怨敵が寵臣秀吉より教如上人を差越ゆるを顯如上人ハ不審思ひ召聞ゆる智謀の秀吉ふも何様深き子細り有んと家老下間法橋を以て急ぎ

其趣意を問ひ給ふ木下半助謹んぐ稟しけるは主人秀吉中國征
伐を止り今般主君信長歿死小就き火急り吊ひ合戦を遂ん為備
中高松より馳登りて本國姫路へ着城おす所新門跡教如上人御緯
姫路に勸化せしるる段青齡の漂泊痛く存ト秀吉不肖に候へ
ども御勘氣の御愛ひ稟さん為家来半助を差添く芽出度御親子見
参の儀御危踏ふく執計の候ふ依之秀吉の書簡を持参仕る御披露頼
み存るると封ぜし書状一通き出す下間頼く頭如上人へ半助が口演
を稟し上て秀吉が書翰を捧げたり上人封押断く讀給ふ新門
御勘氣愛ひの緯秀吉が一身一命に換て上向謝罪御詫稟すべく間上
人にも免許ふ給はせしるる就くハ本願寺宗門の興立永續繁昌令

るの趣意委細新門に稟し談ト置ぬれを直に聽せ給ふふべしとの
文意より頭如上人熟々と御覽して使者の口演書翰の文体勘當乃
愛ひを述べ述く用事ハ新門が口傳し聞給へとは是非を論せぬ紹介を
父子對面おさしめんとの情を含み計ひあり上人逸くも推量り給
へば聽く教如上人を招呼せしれ秀吉が稟し合り次第を尋ね問せ
給ひけまば此時教如上人答へて曰ふ様今般信長公不慮の御落命ハ光
秀が逆罪天誅遁れがく十目十指思まざる者か最も信長在世り
於てハ本願寺の法敵なりと雖も光秀が為すは思莫大の主君かり渠
人道に非ざるの所行悪むべきの最りと謂へし惟ふり光秀信長を討せ
以て上人を甘味欺き賺し門徒勢の助力を乞ひ秀吉が對ふ吊ひ合戦を

折うんと計る緯頭然より上人過つて光秀に荷膽し給ふも主君を弑せ
逆賊と興す出家の所行不相違せん俱小天誅遁れ給ふも秀吉誓
織田家の将士も弥本願寺を怨敵と怒り猶々當宗門を仇をふり竟
にハ法滅小違ふべき上人悪小背き義に順ひ秀吉が吊ひ鬪戦小合体し
援助の兵卒与へられ逆賊光秀を討し給ふも織田家の氏族古老の
臣下僉上人の正實を感心し悉く歸依信仰の門徒と成べし且逆賊誅
伐あり早りて天下平常の後小到らば秀吉當寺の大檀越となり原
に於て本寺再建計るべし誓紙を以て稟し合めらるるも委細審ら
に演給ひけれ上人限りお悦喜ましく秀吉の異見能俺心す協へ
り既り光秀より使者を以て俺を逆徒と誘ふと雖も俺争叛逆乃

穢座に與入人や弥陀の正法ハ正實の信あり奚不邪曲の徒り媚る
べきやは秀吉吊ひ合戦を營まば俺門徒として之を助くべし
秀吉が使者半助を召し父子面會の仁愛を謝せられ半助を厚く
饗應し給ひ稟し越水一合体の旨一々承引仕るべしとば半助へ
も委細仰せ合めらるる猶御返書にも書認められ姫路の城へ歸
し給へり

○羽柴秀吉丹羽長秀を以て織田信澄と謀る 并び信澄丹羽を城中招く
諸も羽柴筑前守秀吉は光秀が所存の裏を搔んと大概夫と遠察
ありかば教如上人を談合れ急り本願寺へ因り寄新門勘氣の愛
いと執計る頭如上人御悦び斜あらず素より賢明の善知識ふれば正

義の軍に属ハ順ふりとして竊小五幾内の門徒の者へ廻文を以て解
 示されつて秀吉が軍を援け給ふ茲に於て筑前守秀吉ハ倍々軍威
 躬に備り同く六月八日姫路の城を進殺し摂津兵庫に着到有
 所へ丹羽五郎左衛門尉長秀ハ鷲の森乃敗兵を引卒つ泉石塚
 の津にも屯し難く大坂の地へ引退きしが羽柴秀吉備中高松より
 引歸し摂津兵庫に着陣せし由大坂表へ聞へに々々長秀取敢ず
 兵庫に趣き秀吉に會合して凶愛を語り尼ヶ崎の城守とふりたる
 織田七兵衛尉信澄信長公の舎弟織田武と伯父あり主君を殺されふが
 逆臣光秀の味方と成り四國出勢の軍兵を引く尼ヶ崎の城へ歸り
 一と告秀吉聴く悪みく曰く信澄ハ七君の正しく甥ふり織田は

家門の上帝に列しふが卑しく渾家信澄の室ハ光秀の縁に曳
 され君臣同姓の大禮を亂し逆臣を抱ひて与する長女あり今年廿七繚人面獸心獅子
 身中の蟲と謂べし先信澄を誅伐して味方軍神の血祭とせん候し
 表立く軍馬をさし向は光秀之を救はんとして為し唯宜しく謀計を以
 て士卒一個も害ハざる様暫時小城乗取べき方策あり最も尼ヶ崎
 を取得る時ハ則ち味方の本陣として京都へ責登る寄所はし諒
 繚貴殿の御計ハ小依て容易落去致すべき間早く馳向く信澄を
 生捕りに給へし勧め々々バ長秀摠みたる面色して曰く信澄既に光秀
 一味ふるに俺們馳向ふとも必し敵すべし最も攻破るに難く々々
 ども士卒を損せず生捕繚ハ請合難しと答へけきは秀吉笑つて稟

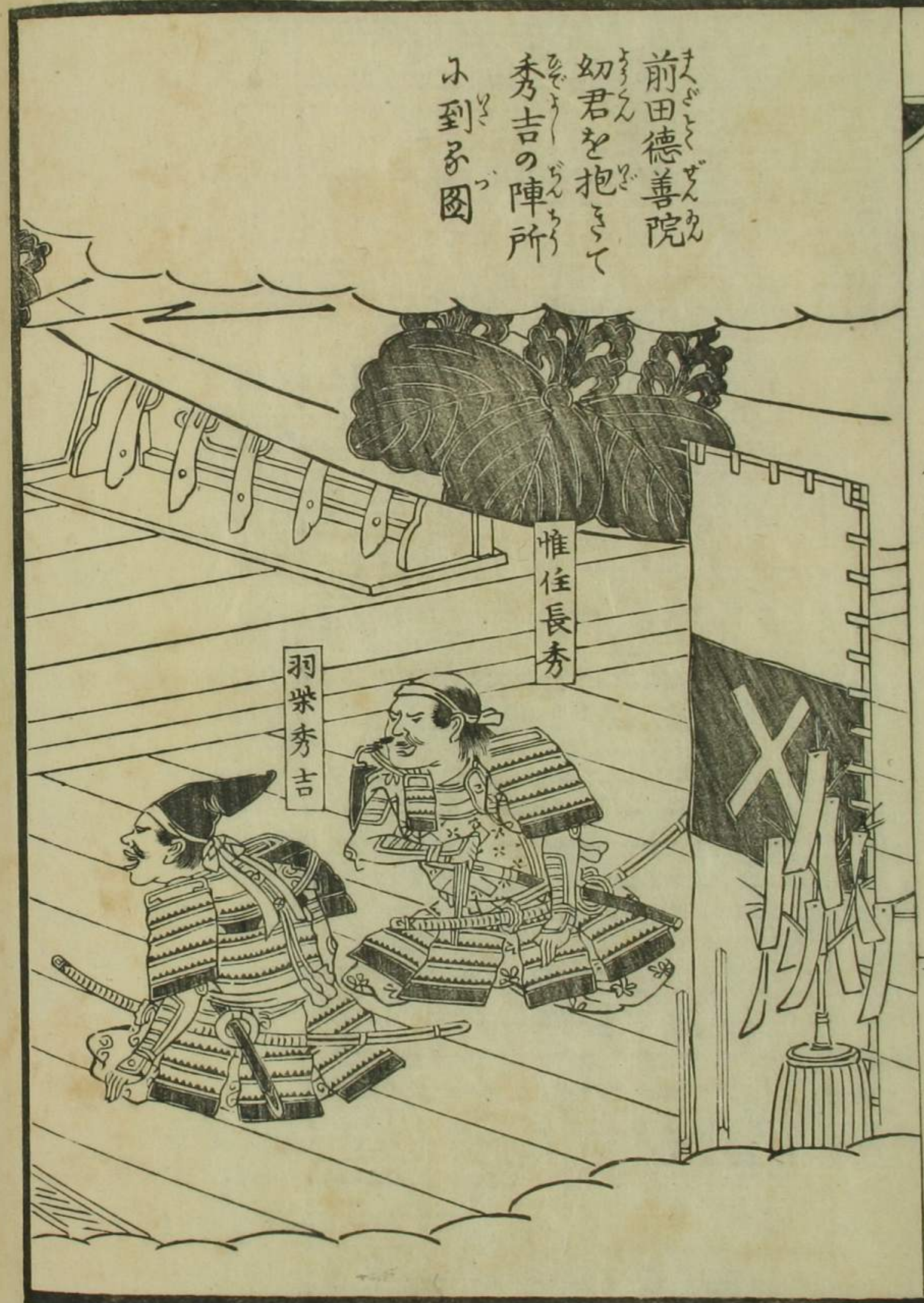
されどもは然バ余手段こそ思ひ設けり貴殿ハ唯手勢計リを引率
余中へ某の邪等の内究竟の壯者を撰み入る伴行る傍を放き尼
ガ寄の城下に陣を居城中へ使者を以て云すに簡様々々に云送ら
ば信澄貴殿を城中へ招請せん余時は如此々々に做給ひふは手を勞
せばしと擒もろさんと謀計の次第を授けしうば長秀大きに感心ふし
て實万全の妙策ふりてとて歡んぞ領承しけまば秀吉即刻加藤福
島を呼て余方達の家来乃内挂市兵衛落合勘藏井上大九郎古橋
佐助四人の壯者呼出して丹羽殿へ貸候しと指揮有々れバ兩勇畏つ
る家来を召出し長秀へ貸与して連させける談四個ハ身の長も高の
らば衆目にも立ざる小兵ふれども武藝力量拔群の勇兵ふり長秀

四個の勇兵を連立しや打立んとする所へ德善院玄以齋ハ去る六月
二日二條の城にて中将信忠郷の遺命を承り公達三法師磨を預り奉
逆賊光秀方の敵乃中を辛くも潜り脱く幼君を救ひ尾羽清洲をさ
して逃退るる今時幼君を補佐憑む人は羽柴筑前守より外には
志して再び清洲の城を啓行して播州姫路を志して来りたるに早
羽柴にも亡君吊い軍とて根州兵庫へ着陣せしと巷の風説聽把々
れを德善院天小も登る心地と漸く秀吉が陣へ来着す茲に於て
前田德善院ハ信忠卿末期の御遺言を丹羽と羽柴へ話説つ幼君三
法師磨今年五才と手渡し奉る誠に德善院の忠節の働き兩將
も感涙落して讚賞せり殊々秀吉ハ大きに悦び幼君無難に在す上



玉堂画

前田徳善院
 幼君を抱きて
 秀吉の陣所
 小到る図



ハ俺輩龍の水を得たる心地一織田三代の大將軍と仰ぎ諸軍之
 を示し置んと命の將士と呼集はせて面々拜謁ふさしめける恁て秀
 吉長秀に稟しけり測らざる幼君の無事を拜すハ是勝軍の吉兆か
 るべく急ぎ尼が寄の城を乗取城内を随分掃除せしめ幼君を迎へ給
 へと稟されりまき長秀即時に手勢を引卒し尼が寄の城下に到り城
 より四丁計り隔て陣取使者を以て城將信澄へ稟し送らす使趣に曰
 く今般光秀信長を弑殺し京地に専ら暴威を揮ふ其許にハ亡君
 の御家門として幾き當城に御座る躬ふれを嚙御無念なりと思し
 召らん俱不戴天の君父の怨敵誅伐御工夫有べく存ト入其迎も心
 矢猛に送ると雖も孤勢ふれを儲思ふに任せず万乞其許の勢と

一手に成衰れ御指揮を受候ふて俱に逆臣討遂と候ふ羽柴秀
 吉中國より引返し是も光秀を討んと謀るより風に沙汰を承り候
 ふふり然ども秀吉素卑賤にして殊に織田家の譜代に非ず渠尚光
 秀を討課せふ其許俺們無功の者として成て後々秀吉に慢らるハ必
 定ふり其許にハ亡君の御一族某ハ織田譜代の老臣あり奚ぞ秀吉
 が下に属すべきや依之其許と俺勢合併し秀吉に先んて馳登り逆
 臣一族責亡して俺們が勲忠を顯はす則ち秀吉に鼻を明せて物云せ
 就夫某計畧の密談も候へば御示談の上行をんと欲す御城中へ推参
 仕るべきり又ハ某が陣へ御入駕給たる哉最も密事の示談候へば某手
 勢ハ陣中に残り止め主従五六個他視り立ざる様御對面遂度を演

させらる信澄聴早つく思惟様ハ長秀ハ頗る勇功の者に織田家四
天王の介一個あり今味方とふして明智に属せば光秀七歩の強實と
成なく僥倖長秀俺胸中を曉ず密に来つて閑談せんとは是退引させ
ぬ能謀り時あり長秀を此方へ招き寄て力量の者を密に躲し置座中
に於て不意に虜へ其上は利害を説得入恩賞を約して味方とふし
渠に命とて秀吉を討すべし長秀も秀吉が下に立人絆口惜く思ふと
使者の口演異儀おく同意ふすべきあり然ハ是重々の明智が大幸倘
亦長秀承引せんば俺速に首級を刎く謀つて介首を秀吉へ送り長
秀逆臣光秀に反心り味方の軍議を漏さんとは此謂り討取ると欺り
秀吉も城中へ招き入て同く引捕へて誅すべしと心裡立地悪計を

伎倆出し長秀の使者へ稟し返す様ハ御使命の趣き承諾仕り候ふ
某も亡君の御怨を察し不日に京都へ馳登りて吊ひ合戦すべし決
する所測す貴殿の勧誘を承り誠忠勇烈感づるに余りあり委細
ハ對顔の上尽話すべく此方へ御来駕を希ふと云く使者を陣所へ歸し
たりけり恁て織田七兵衛尉信澄ハ丹羽を引入生捕にせんと家臣の中
より力量有者三十個計りすより出し客の間の次小躲れさせ長秀座
に着玉蓋を出し合蹄の咳拂ひを聴あはば一様に飛出て把り拵伏
生捕にせよと指揮ふしつ急いそ介準備を云度し長秀の入来するを
待懸し噫夫双方奸策偽謀心工し何方絆を仕遂や否や譬ハ狸の
傍へ狐が寄て介妖力を諍ふに等く唯寸隙の遲速によりて勝負分つ

場合バホは次ツギの回クワの巻首クワンブに説トクを省給シヨクへ

繪本石山軍記第三編卷之六

